

翻刻『としなかこう』

入 口 敦 志

要 旨 李花亭文庫蔵の写本『としなかこう』を翻字・紹介し、その成立と特徴についての解題を付す。

金沢県立図書館の藤岡作太郎旧蔵季花亭文庫に、『としなかこう』なる一冊の写本が所蔵されている。

「としなかこう」とは加賀藩第二代の当主となった前田利長。本書は利長の逝去を機として書かれたものと推察され、利長を追悼するとともに、それを契機とした説教のかたちをとっている点で非常に興味深い。

利長は永禄五（西暦一五六二）年、前田利家の長子として尾張にて生。母は利家の正室芳春院。幼名、犬千代、のち孫四郎。はじめ諱を利勝といい、のち天正十七（一五八九）年、利長と改める。最初父とともに織田信長に仕え、天正（一五八一）九年、信長の娘永^よを娶る。信長死後一時豊臣秀吉と敵対するが、その後臣従。同十二年から十三年にかけて越中にあつた佐々成政を破り、十三年越中砺波、射水、婦負郡に封ぜられ、守山城に移る。このとき羽柴の姓を許され、肥前守となる。慶長三（一五九八）年、父利家の隠居に伴い家督を嗣ぎ、このとき従三位権中納言となるが、同四年権中納言を辞す。同五年の関ヶ原の戦には東軍につき、戦後加賀、能登、越中一二〇万石を領した。同十四年家督を弟の利光（のち利常と改める）に譲り、富山城に隠居。のち富山城の焼失により、越中関野に城を建てて移り、地名を高岡と改める。慶長十九（一六一四）年、数年来の持病である腫れ物の悪化により、五月二十日高岡城にて逝去。享年五十三歳であった。

『としなかこう』は利長危篤の様子から死後の領民、一族の悲しみの場面から始まる。なかに出る「御だいさま」（二丁表一行目、以下「2オ1」のように記す）は正室の永。永は利長死後落飾して玉泉院と号し、金沢に移り住み、元和九（一六二三）年五十歳で没する。「同筑前守利光」（2オ9）は右に出る第三代利常。利光が筑前守を拝領したのは慶長十（一六〇五）年、名を利常と改めたのは寛永六（一六二九）年のことであり、そのときには肥前守を拝領している。

この二人の遺族が利長の死去に際して、古歌を引いて悲しんだとの記述があるが、外にそのことを示す資料を見い

だせないため、史実であるかどうかは不明。ほかの内容から見てこの著者が利長の近辺にいた人物とは考えられないため、むしろ仮託しているとするべきか。

利長の戒名は加賀藩の諸記録類によれば「瑞龍院殿前黄門正二位大納言聖山英賢大居士」（イ）であるが、本書では「すひりういんてんしやうさんみさきのかうもんしやうゑいけん大こし」（イオ一）（ロ）とし、また後半に漢字で「瑞龍院殿従三位前黄門聖山英洵大居士」（25ウ4）（ハ）と記している。ここで官位に注目すると、利長が正三位であった記録は見られず、（ロ）の「しやうさんみ」は誤りであろう。ただし仮名で「さんみ」と書かれているため、「二位」を誤ったことよりは「従三位」を誤ったことの方が自然か。おそらくは「しゅう（従）」の「ゆ」を「や」と書き誤ったものであろう。さて、利長の死の時点での官位は従三位であり、正二位大納言は追贈である。とすれば、（ハ）で「従三位」とし、また（ロ）（ハ）ともに「大納言」を欠くことは、本書の成立時期を利長没後官位追贈以前はかなり早い時期と推測する手がかりとなるものか。官位追贈の時期については不明であるが、「加賀藩歴譜」の注のごとく没年の十二月とする記録も見えることから、没後そう遠くはない時期と考えてさしつかえないであらう。

さらに、本書には「ほうあん寺と申ほたひ所」（3オ8）で葬儀が執り行われたことを記している。これも記録類にある「宝円寺」であろう。宝円寺は慶長年中に利長が広山恕陽を金沢から高岡に呼び寄せて創建した曹洞宗の寺で、利長没後その法号にちなんで瑞龍寺と改名されたという。その改名の年月はつまびらかではないが、葬儀ののちしばらくしてからと考えるのが自然であろう。だとすれば、本書が「ほうあん寺」とのみ記していることも本書の成立が利長没後の早いうちであった可能性を示唆していよう。

本書の末尾の元和七年という日付は成立年か書写年か不明。以上の考察からみて、書写年と考えるのが妥当であらう。

うか。

作者については不明。途中夢の中に「かうかく聖人」(24オ1)という僧侶が登場し説法をし、自分を「本国越中森山の生まれ」(24オ6)で「ち、はわたぬきの源太」(24オ10)と名乗りを上げるが、この人物についても未詳。年齢が九十九歳ということであれば生年は永正十二(一五二五)年で、父が森山で死んだのは三歳の時(24オ11)であるというのは永正十四年のこととなる。「わたぬき」という姓は近世初期の加賀藩の侍帳などにはみえない。現在高岡あたりに「綿貫」という姓が若干あるようではあるが、関係づけられるものかどうかかわからない。

本書の特徴として挙げられるのは、先に述べたように、利長という人物の死を契機とした説教を彷彿とさせる点であろう。利長の死そのものを悼むのは当然のことであるが、その死は様々な仏教教義を引き出し、人々に教え諭すための一つの契機となっている。そのことを端的に現しているのは、「御はうみやうの文字をうき世のことわりと法の道にわかち見たてまつる」(4オ5)部分であろう。利長の法号を説くかたちを取りながら、教えへと導く工夫が見られる。さらに五丁裏からと二十一丁裏からの二カ所に渡って各宗派の特徴をいうところがあるが、それを難ずることはなく各宗派間のバランスをうまくとろうとしているように見え、そのことから特定の宗派の寺における説法ではなく、大勢の人々の集まる辻などで説法と見るべきか、興味深い点である。

以下、書誌を記す。

石川県立図書館李花亭文庫蔵本 番号113/42

外題「としながこう」(元表紙の中央に書き付け。後のもの)

「としながこう」(ボール紙表紙の中央に子持杵の刷題簽を張り付け墨で書き込み)

寸法 縦 十八・一 横 二十四・八（センチ）

袋綴 線装本

もとの表紙の外側にボール紙の表紙を付す。

表紙 一丁 遊紙 一丁 本文 二十七丁 裏表紙 一丁

本文 半丁十一行詰

※備考

本文二十五丁裏の四行目から最後まで文字がそれ以前より大きくなる。ただし、同筆か。

快く翻刻を許可していただいた石川県立図書館に感謝申しあげます。

表紙 としなかこう

1オ1 いたみたてまつるすひりういんてんしやうさんみ

1オ2 さきのかうもんしやうゑいけん大こしはうこの

1オ3 はしめみことのりふしきいんてんきうせうまん

1オ4 こしこれをなす抑十経にいわくせつさんふちう

1オ5 のくすりもしるす事あたはすきはいわうのは

1オ6 うしゆつもつきぬときに慶長十九きのへとら

翻刻『としなかく』(入口)

- 1オ7 のとし五月雨廿日のそらに羽柴肥前守利長きやう
1オ8 年月つもる御なやみ次第御よりはり給へは誠に古
1オ9 歌に
1オ10 きのふすきけふとくれぬるあちきなや
1オ11 今はかきりの日こそちかけれ
- 1ウ1 とよみしも偽ならずときは秋にもあらね共
1ウ2 しも夜のきりくすよさむによはるこ、ち
1ウ3 侍りされは古歌
1ウ4 きりくす夜寒に秋のなくまゝに
1ウ5 よはるのこゑのとをさかりゆく
1ウ6 終には御遠行なされ加能越三つの国のしつ
1ウ7 のめしつのをにいたるまで空にあふき地にふ
1ウ8 してをもひのむねをましさうかんになみたを
1ウ9 うかへし事はた、瀧津瀬のなみにして袖を
1ウ10 しほり涙の有さまもろこし舟をよするは
1ウ11 かりなり古ことはに我此袖中有東海

- 2才1 とはかやうの心をこそ申侍れ殊に御たいさま
 2才2 の御なげき実はなにもいたくなりぬれは
 2才3 ちるわかれをさへかなしめりいわんやいもせの
 2才4 御中申計なした、やみにくれ給へは古の人の
 2才5 別によめる歌をそおほしめしやり給ひ
 2才6 ける
 2才7 月のゆく山にこゝろをおくりいれて
 2才8 やみなるあとの身はいか、せん
 2才9 とあこかれ侍り同筑前守利光（つとむら）きう御涙
 2才10 にむせひ御袖をしほり給ふ涙の露
 2才11 を今は御形見とおほしめしける折ふし風いた
 2ウ1 く吹ければ古歌をそ引給へり
 2ウ2 露をたに今はかたみのふし衣
 2ウ3 あたにも袖をふく嵐かな
 2ウ4 此外御一門二つかのふしのなげきもおもひ
 2ウ5 のふかきを四方のうみにたとゑんとすれば
 2ウ6 倉海思を あさし其心さしのたかきの中

翻刻【としなかこう】(入口)

- 2ウ7 の山に同しきとすれは須弥なをひきし心
2ウ8 あるひとくはむしやうの心をひらき古歌
2ウ9 などおもひあわせ侍り
2ウ10 あすまての命もしらすありかほに
2ウ11 さきたつ君をあわれとそいふ
- 3オ1 とひとつ御けふりとなりまいらせ候はんと
3オ2 おもひ侍るしかれとも古歌
3オ3 ひとり来てひとりさりぬる道なれば
3オ4 つれてもゆかすつれられもせず
3オ5 此歌の心にてと、まり給へり同此歌の心はき
3オ6 やうもんにいわく独生独死独去独来
3オ7 此もんの心なれば御姿をと、め申へき世にも
3オ8 あらすはうゑん寺と申御ほたひ所へをくり
3オ9 奉りかう花たうみやうさくわらんしや
3オ10 きんくをちりはめそなへたてまつり千そ
3オ11 う万そをくやうしせきやうを引かんの

- 3ウ1 しやうこんはこんくまりしやこめなうをち
 3ウ2 りはめりやうらきんしやうをよそをひや
 3ウ3 うらくけまんをたれすまんの御ともおひた、鋪
 3ウ4 しておくり奉り一しのけふりとなし侍るをこそ哀と
 3ウ5 そ申計なかりけり
 3ウ6 実古歌とりへ野、夕部のけふりいかなれは
 3ウ7 ふかきおろかもいとわざりけり
 3ウ8 折ふしくも井におとつれけるにしきの水に
 3ウ9 鳥のをとはなにそ、くせんてんの五月雨
 3ウ10 わか水をおしみてとりもむねをおとろかし時
 3ウ11 をかんしてはなもなみたをそ、くかと念ひ
- 4才1 侍りすなわち御ほうみやうをはすいれういん
 4才2 てんしやうさんみさきのかうもんしやうさんゑ
 4才3 いけん大こしとかうし奉り御いはいにかきあ
 4才4 らわし侍りそれかしておかみたてまつり
 4才5 御はうみやうの文字をうき世のことわりと
 4才6 法の道にわかち見たてまつるにすい

翻刻『としなかこう』（入口）

- 4才7 の字はきすいと申ていそくあまりの間す
4才8 いふくやうゑんをたなひかせたまれうの
4才9 字は中納言にてましませはもろこしのことは
4才10 にれうさいといへるなみありしやうの字は
4才11 せい人の字也ちう夜に万民をあわれみた
- 4ウ1 まふ事にしへのせい人にひとしくましませ
4ウ2 り山の字しゆみせん山の字也御いくわうたかき
4ウ3 心なりゑいの字は数の人にすぐれたるをゑいと
4ウ4 いへりしかれば数の一のかふりとなり給へゆ（マユ）
4ウ5 へなりけん字はけん人の事也度々弓矢
4ウ6 に勝利をえたまふ心也いんでん大こしきた
4ウ7 まれるはうなりこれはいそく余の夢
4ウ8 まほろしの世のならひ実にあしたにひ
4ウ9 らくゑいくわの花は夕部の風にちるう
4ウ10 き世夕部にむすふ命の露はあしたの日に
4ウ11 きへやすき此かいなり故にこんかう経に

- 5才1 云によむけんはうやうによろやくによてんを
5才2 ふきによせくわんと、き給ふとありかたきの
5才3 りのをしへなり此きやうもんの心をとりてや
5才4 もろくの古歌
5才5 夢の世にまほろしの身の生れきて
5才6 露にやとかるよひのいなつま
5才7 世中はまとろまで見る夢なれば
5才8 さてやおとろく人なかるらん
5才9 た、しかやうに世中を夢と見侍るこそ
5才10 終にさむへきのりのおしへとさととり侍れ扱
5才11 ちういんのうちにはせんしうのちしきしよ
5ウ1 さう日夜のこんきやうさせんくふうはう
5ウ2 もん有國中諸しうはいつれもふきんあり天台
5ウ3 真言はけんみつの二はうのかんもんをなし
5ウ4 浄土宗はふきやうの念仏さんまいをなし
5ウ5 同たうしはやるさいけ一たうの御もんとはしん
5ウ6 らん聖人のしやうきやうをよみ日れん中

翻刻「としなかこう」(入口)

- 5ウ7 は妙の字を五十余年の御せつはうものこら
5ウ8 すしてゑいけんかうは御わうしやうのたゝしき
5ウ9 事みた如来みつからむかへくわんをんほさ
5ウ10 つはれんたいにうけせいしほさつかしらをな
5ウ11 てふけんほさつはたをさしあけおんかく
- 6オ1 とゝのへ五しやのしやうしゆいにうしたてま
6オ2 つりしやうほんれんけのうてなにしやうし
6オ3 十地とうかくの御位につき給ふこそ二世あん
6オ4 らくの君とは申侍れされはくわんいんく
6オ5 わきやうによくらくわんいんけんけんさ
6オ6 いくわよくらくいくわけんこけんさいいんき
6オ7 やうもんの心にてよめる古歌に
6オ8 すきし世も又す系のよもしられけり
6オ9 君のこの世のさかんおもへは
6オ10 かやうに事こまかに有まつのもとにや
6オ11 すらいすさみ侍る中に少まどろみけれ

- 6ウ1 はうつゝのやうにをきな一人来り申けるはた、
- 6ウ2 いまの物かたりしゆしやうに侍りしつわくは
- 6ウ3 当年九十九に罷成けるか一には古歌に
- 6ウ4 山さとにうき世いとわんとも、かな
- 6ウ5 くやしくもすきしむかしかたらん
- 6ウ6 此歌の心ふしんに侍る間二には玉の瓦の
- 6ウ7 おしさりきりなし世の中にあるはゑ
- 6ウ8 せたるものにかいせられていと千年の命
- 6ウ9 もたもつへきとおもひ此山に入てひとり
- 6ウ10 有いまのことわり聞なほく何としても
- 6ウ11 かれさる道か又のかる、力も侍るかと来
- 7才1 り侍りそれかしいわくそれ古歌に
- 7才2 みな人の物知りかほにしらぬなり
- 7才3 かならずしするならひありとは
- 7才4 又何事もみないつわりの世の中に
- 7才5 しぬるはかりそまことなりける
- 7才6 又うき世そとおもひしりくいとほぬは

翻刻『としなかこう』（入口）

- 7才7 　　しらぬ人こそはかなかりけり
7才8 　　誠にわかきさへめいとの道をはおもひ侍る
7才9 　　におきな的身としてさやうなるはおろかなり
7才10 　　けにいにしへもみたりのおきな有いつれも
7才11 　　しする事をかなしみ一人はうみへ下しをの
7ウ1 　　かれんとかくれ一人はさとに入しをのかれむ
7ウ2 　　としのふ一人はおきなをやうに山に入てしを
7ウ3 　　のかれんと身をひそかにすれとも三人
7ウ4 　　のおきな終にはかなくなりけりしら
7ウ5 　　さるやまちにのそみいちにかくれてもの
7ウ6 　　かれかたきはしやうろうひやうしのく
7ウ7 　　るしみちやうにいりかんくつにこもりても
7ウ8 　　ふせきかたきは無常のせつき来りき
7ウ9 　　たつてかへらさるは身に積る年月ゆへ
7ウ10 　　に古歌にみな人はとしをとるとや思ふらん
7ウ11 　　終には年にとられこそすれ

8才1 かうふれはわか身に積る年月を

8才2 おくりむかふと何いそくらむ

8才3 しやうしてしもんにおもむく事山川の水に

8才4 同しゆへに古歌に

8才5 谷川の木の葉かくれの埋れみつ

8才6 なかるゝも行したたるも行

8才7 ゆひを折かそへけるにかれもしし是も

8才8 しすひとりとして残る夕部なしゆへに古歌

8才9 あるはなくなきはかつそふ世の中に

8才10 あわれいつれの日までなげかん

8才11 世の中は市のかりやそまでしはし

8ウ1 ひとりのこらんたくれの空

8ウ2 かやうにいつれも露霜とはかなく成ぬる

8ウ3 世なれはいよく古歌に

8ウ4 見し人は皆露しもときえにけり

8ウ5 さてをとろかぬわか心かな

8ウ6 誠かしこきおろか成もたかきもひきゝも

翻刻『としなかこう』（入口）

- 8ウ7 むなしく成ぬる此かいのさためなるゆへに十王
8ウ8 経にいわくたつせいのみうきは貴賤をも
8ウ9 ろんせすしやうしひつせんなりたれかこ
8ウ10 れをまぬかる、月をえんととき給ふも左の
8ウ11 心のみり成実かんわうのりふこんのこ
9オ1 わふれたうわうのやうきひのちやうあいも一
9オ2 しの夢の間也しんのしくわうはめいと鳥
9オ3 をおそれて天に鉄のあみをはりりや
9オ4 うのふていはふしのくすりをもとめんとし
9オ5 ろかねのはちに露をうけたまへ共いつれも
9オ6 しをのかれたるためしなしかれもをろ
9オ7 か成三世をさともししやか如来にも卯月八日
9オ8 に誕生のあれは二月十五日のねはん有
9オ9 しやうしやひつめつのゑしやちやうりのくる
9オ10 しみのかるへきにあらすかやうにさととりわか
9オ11 身を見ればきしひたいのねなし革命はゑ

9ウ1 のほとりにつなかるる舟に侍りゆへに古か

9ウ2 年ことに身をうき舟のをひ風に

9ウ3 とをさかり行わかのうらなみ

9ウ4 世の中も何にたとゑんあさほらけ

こき行舟のあとは白波

9ウ5 かやうにはかなき玉の尾をなかへらんとを

9ウ6 おもふ心はくちたるなわにてのつのこまをつな

9ウ7 きとめんとするに同じ誠ふるきことにも手

9ウ8 になかきなわをとりてをひをつなかとすれば

9ウ9 光いん矢のことし月弓に、たりといへり何

9ウ10 やうにしてもと、まる事なき此世なればはやく

9ウ11 こしやうをもとむへしとをしへのために

10オ1 極樂しやうとの有様たいみやうものゑいくわ

10オ2 をといてきかすへしかしこの大しゆきんな

10オ3 らかまりのをとけんたつはわうかふへの音ら

10オ4 くへけてんかしよとくのつ、みしたい天王のみ

10オ5 やうかく共もさらいらいしやうの上ほんれんた

翻刻『としなかく』(入口)

- 10才6 いのかくともにはおよひかたししゆくたいたう
 10才7 ひのゑんしやうしゆくわんきゑんのはりしつ
 10才8 たうたんしゆかひらしやうのむうけ
 10才9 まれい山のせんたんしゆゑんふきうのせんふしゆ
 10才10 しやたいさんのにくたししゆふたい山のさらしゆ
 10才11 さうくわのをんかくしゆくかるしゆしやうのめ成
- 10ウ1 を一所にあつめてもこくらくしやうとのおう
 10ウ2 こんしゆなりしゆしやこめなふのはうしゆにはさら
 10ウ3 にをよひかたしまんたうせうにのしよせうち
 10ウ4 せつさんかうおんのむねつちりうすいちやう
 10ウ5 しやかやしやうちはやせつ所のはくろち
 10ウ6 たうちうかいよのうんめいち是を一所にあつめ
 10ウ7 ても極楽ちやうとのはくとくのいけのなみのを
 10ウ8 と国土もくうむかとのうるにはたとへん
 10ウ9 するにたよはす大ほんかうたいのかくしやく
 10ウ10 たいせんけんのうてなとそつ天のまにはう
 10ウ11 天うりんしやうわうの八ちんのとこゆいま

- 11オ1 こしのさいはうけんこちやうしやか金のをく
11オ2 ろうこれらのくう天ろうかくをのきしり
11オ3 いらかをならへて作りたてたるも極樂じ
11オ4 やうとの大はうのいらかにはたとへとするに
11オ5 およはすかやうの極樂しやうとにはやく
11オ6 わうしやうせんとおもひをきりてすみやかに
11オ7 ほたいをねかふへしをきないわくしゆせう
11オ8 に侍り但かやうのしやうとへわうしやう申事
11オ9 はみた如来をたのみたてまつるかしやかか如
11オ10 来をたのみ侍るかくわんおんほさつをしん
11オ11 し奉るやそれかしこたへていわくみた
- 11ウ1 しやくわんおんは三世りやく同一躰也但
11ウ2 すゝめのためにみつのほとけのゆらひをと
11ウ3 くへしそれみたのほんちをたつぬるにし
11ウ4 へうなほんしありとしてさいしやう国の
11ウ5 ていわうなるかたあうしやう国にゆきたまい

翻刻『としなかく』(入口)

- 11ウ6 たうしやう国の帝王のひとりのひめをひ
11ウ7 そかにふうふとならせたまへはちかわう
11ウ8 これをとかとしてたつせりはらと申
11ウ9 人のすみかなき所へひめともになかした
11ウ10 まへりたうかうあるうちに二人の御子
11ウ11 も成たまへりかくあるへきにもあら
- 12オ1 ねはきさきと二人のわう子をはこのは
12オ2 らにをき給ひ御迎にまいるへきとてわれ
12オ3 一人さいしやう国へ帰り給ふいそきたまへとか
12オ4 た道三年三月九十日にて上下七とせにお
12オ5 よひければきさきはまちかねたまい二人
12オ6 のわう子にをしへ給ひけるは父はこれよ
12オ7 り西の方へゆき給ふと是をさいこの御こと
12オ8 はとしてあしたの露ときへさせ給ひけり
12オ9 二人のわう子は御母にはなれ十方にくれ
12オ10 ち、のかたへと西をさしてそゆき給へ
12オ11 りはるくゆきたまへは人お、く供奉した

- 12ウ1 てまつりくるまの来るを見給ひ終に人
12ウ2 と云事見たまわねはおそれかたわらへゆ
12ウ3 きたまへりありとし是を御覽してふしき
12ウ4 なりこのはらは人なきはらにありけるにあ
12ウ5 れに人の見ゆるは尋てまいれとおほせけり
12ウ6 二人の王子はおそれて人によりつきかねた
12ウ7 まふやう／＼にいたきたてまつりまいりけ
12ウ8 れは二人のわうしおほせけるはわかち、は西へ
12ウ9 行給ふと母のをしへてし、たまふゆへに父を
12ウ10 尋てゆき給ふとありければ此よしありとし
12ウ11 きこしめしこれこそわか太子なりとて
- 13オ1 きさきのむなしくなり給ふをかなしみ
13オ2 もとゆいきちかみやうはうさうひくと
13オ3 申なり二人の太子をはせんくわうせんしん
13オ4 となつけたまひ五こうしゆいやうさいちう
13オ5 こうの御苦勞六十くわんをたてたまい女人成

翻刻『としなかこう』（入口）

- 13 才 6 仏の御法をなし終にしやうかくをとり
13 才 7 たまいて十二巻をは薬師にまいらせ四十八
13 才 8 巻にしてあみた如来となり給ふ扱し
13 才 9 やか如来は天ちくの上ほん大わうの御子七太た
13 才 10 いしと申也御母はまやふ人と申ける十九の御と
13 才 11 し大くうをすめり下たまひあららせ人を
13 ウ 1 師とたのみ山にのほつてたき、をとりたに、
13 ウ 2 下つて水をくみなん行苦行ましくゝて
13 ウ 3 有年の十二月いるにほしをみてたうをさ
13 ウ 4 とりそれより世にいてさせたまひて五十余年
13 ウ 5 の間は八まんしよしやうきやうをときあまね
13 ウ 6 くしゆしやうをさいとし八十三のうのこくに又
13 ウ 7 はんにいり給へりこれよりしよしとわか
13 ウ 8 ちて色々のはうの道に有さりなからわけ
13 ウ 9 のほるふもとの道はお、くあれともくも
13 ウ 10 井の月を見る事はひとへなるへし又かや
13 ウ 11 うに御しゆつせなき以前にわうらい八せんとの

- 14才1 御苦勞五百ちんでんかうの御しゆきやうありと
 14才2 いへりさて又くわんおんほさつは本地あみたの御
 14才3 子二人せんこうせんしんくわんおんせんしとなり
 14才4 給ふといへり此くわんおんはちひ第一のほさつ
 14才5 なり大な御身を三十二さうにへんしてし
 14才6 ゆしやうをして仏になさんとあわれみたまへり
 14才7 されはしやか如来御せつほうありけれともになんこう
 14才8 といふうらはのつり人とも計仏せつをそむきてし
 14才9 やか如来もすぐひかねたまへり然るをくわんおんほ
 14才10 さつすなはち名をにんしこうとつき給ひてつり
 14才11 さを一本にいとを二筋つけはりを二つさげ給ひて一
 14ウ1 とにうを、二つ宛つり給ひけり此うらのものともふし
 14ウ2 きなりときもをけし一度に二つつるやうをならひ
 14ウ3 たきとそわひたりけりにんこう申けるやうは
 14ウ4 われらはおしゆる事ならずわしのお山といふ所に
 14ウ5 しゃかといへる人あり何のやうもなくおしへ給ふな

翻刻『としなかこう』（入口）

- 14ウ6 りゆきてならひたまへとい、ければ釣人ともよろ
14ウ7 こひてつかふ五百にて夜を日につゐてわしの
14ウ8 御やまへそまいるけふのあすのとするほとに
14ウ9 いつれもふつほうに入五百らかんとなりにけりこ
14ウ10 れくわんおんの大し大ひの御ちかひなり又有とき
14ウ11 きんしゃやたと申うら人はも仏法をそむきけり
15オ1 然るを花のかほはせやなきのかみたまのすかた
15オ2 金のおゆうたんこんみゆうのよそおひをなして
15オ3 いつくしき女房とけんし給ひておろか成こにう
15オ4 を、いれてきんきんしやもんにやすらひ給へ
15オ5 りその所の釣人共きもをけし心をなやまし
15オ6 こいちにふししつみけり女房のこのみに
15オ7 はわれはよみものおもしろくおもへる面白よみ物
15オ8 たれ人にもをしへ申へきによくおほへたらん物を
15オ9 わか妻となすへきとのたまへは三／＼とうら
15オ10 の人よみならはんとするに御経を小きやうより
15オ11 大きやうをたん／＼にをしへたまへはみな御

- 15ウ1 経をそよみにける中にも其浦のをとなしき
- 15ウ2 は大はんや六百くわんをもとをしげこんあこんはう
- 15ウ3 たうはんやかつけをもかんとくするゆへにはや夫婦
- 15ウ4 とならんと有ける所を女房中くとかてんして
- 15ウ5 立所にとすに成たまへは其浦人共あつと手を
- 15ウ6 うち仏法にいりてみな仏になる事にも十六人
- 15ウ7 のをとな八十六らかに成なり是をきよらんの
- 15ウ8 くわんおんと申也又せんはうと申御経のいわれを
- 15ウ9 見るにちけんといへるちしきあり仏法よき
- 15ウ10 ちしきなりしかれとも後は山寺をすめりて人
- 15ウ11 さとに寺を立らくをなしたまへり有時つた
- 16オ1 なき共中くゝなるとすきたつて御奉公
- 16オ2 申さんといふ也ちけんちひふかきちしきなれ
- 16オ3 は中くゝとのたまひてつかひたまへりしかる
- 16オ4 をよのさうたちつたなきとそにくみけり
- 16オ5 しかる間此とすたまりかねてちんに申ける

翻刻「としなかこう」(入口)

- 16才6 はしやう人のしひは有かたき次第さりながら
16才7 坊主衆にくみたまふほどに御いとま申なりし
16才8 せん御身のうへに一大事のわつらひてきなはし
16才9 よくの国たか山と申山へ御たつね有へし其山を
16才10 はんふんのほりたまひてわきかへり見た
16才11 まひ候て松二本あるへしその木の本へ御こし
16ウ1 あれといゝてゆくなりしかうして四五年過て
16ウ2 申させしことくちけんわしやう人めんさうと
16ウ3 いふかさてきそり此かさは人のかほのことくに
16ウ4 めくちはなもありてしよくをこのむ事少も
16ウ5 やしなわねはかきなく事大かたにてもなし
16ウ6 かきなけは五躰をしめていためる事かきり
16ウ7 なしちけん是よりほかの大事あるへからずど
16ウ8 すのをしへにまかせてゆくへきとて寺をいて
16ウ9 たり山へゆくにおしへのことくに松有其松の本
16ウ10 ゑゆき給へはいつくしきたうしいて、扱も久し
16ウ11 く候とて七たうからんの寺へつれゆき其寺の

- 17才1 うしろにたきのおつるゑちけんをつれ申すなは
 17才2 ちその瀧の有を柳の枝にてかきのつらへかけん
 17才3 としたまへはそのかき申やうまつしはらく
 17才4 ゆるし給へわれらかゆらいを申へしわれら
 17才5 はちけんわしやうのせんそのるいてきにて七代まで
 17才6 ちけんわしやうのせんそをとりころし申へけ
 17才7 れとも仏法におそれてとりつきゑたると
 17才8 ころにと山をくたりさとに寺をたてらくにふ
 17才9 けり仏法うすくなりたまふをさいわいの事と
 17才10 仕りとりつきころし申へき所にちけんしひの
 17才11 心有によりくわんおんとすにへんして御座ま
 17ウ1 しますをねんころなされたるによりた、いま
 17ウ2 是にてかへつてほろふる也但此水をうくれは
 17ウ3 われらも仏と成こそよろこひなれとい、あへたる
 17ウ4 に水をさつとかけたまへは人めんさうわつと
 17ウ5 さけひちけんもあつとおとろき心をうし

翻刻『としなかこう』（入口）

- 17ウ6 なひしはらくふしたまひてめさめ給へはた、
17ウ7 松二本はかりありて七たうからんは見へさ
17ウ8 るなりこのねむりたる中によみたまふとお
17ウ9 ほへたる御経をたつね見れはせんはうな
17ウ10 りしかもやうくしんすいといふ所有柳にて
17ウ11 水をそゝきたる所なりうたかないせん
- 18オ1 はうのおこりこれなるほとにせんはうは
18オ2 こしやうにもきたうなりたつとき御きやう
18オ3 なり是くわんおんの大し大ひなりちけんも
18オ4 しひふかきゆへに人めんさうもなをりこし
18オ5 やうもわうしやうましませりかならずなん
18オ6 ちもちひの心をさきとして仏法に入へき也
18オ7 実歌にも
18オ8 仏とは何をいわまのこけむしろ
18オ9 たゝしひしんにしく物はなし
18オ10 とよめるも此心也しひの心なくしてけんとの
18オ11 心あらはかならずかきのくるしみをうくる事

- 18ウ1 うたかひなしそのゆへは七月朔日より十六日迄
18ウ2 のうらほんせかきのゆらいをたつぬるにしやか
18ウ3 如来十たいみでしのうちもくれんそんしや
18ウ4 の御母大せうみやうにと申せしかけんとも
18ウ5 つはらにしてしひの心少もなしされはしやう
18ウ6 しやひつめつのならひにてしもんにおもむき
18ウ7 たまふときこくそつのきわうもろくの太
18ウ8 き小きをつかわしひのくるまにもくれんの
18ウ9 母をのせてかきたうにをとしけりもくれん
18ウ10 そんしやはかなしみたまひてしやうとちこくをた
18ウ11 つね給ふにかきたうへゆきたまへはきわうもく
19オ1 れんそんしやに申けるはもくれんほと
19オ2 御子をもちたまへともこんしやうのあいたけん
19オ3 とんの心ふかくしてしひしんなきゆへにかやう
19オ4 に八まんかうのくるしみをうけたまへり是
19オ5 御覧候へとくろかねのはうのさきを大きなるか

- 19 才 6 まの中へさし入てすみのやうにある物をさしつ
19 才 7 らぬきあけてもくれんに見せにけりもく
19 才 8 れんそんしや天にあふき地にふし天地もたう
19 才 9 ようするほとなきかなしみすこしせうしんの
19 才 10 すかたを見せよとありければこくそつのきわう
19 才 11 くわつくとよひければしやうしんいてきけり
19 ウ 1 されともかきになりたまふゆへにむかしのすかた
19 ウ 2 にはあらすかしらいかにも大きにくひわたう
19 ウ 3 しみよりもほそくはらは大海のことくにひろし
19 ウ 4 めしをたむくれはめしよりくわゑんたちの
19 ウ 5 ほりたむけをうける事なしもくれんそん
19 ウ 6 しや又いわくこれもは、のしやうしんにあらず
19 ウ 7 たしか成しやうこありとやありければがき
19 ウ 8 の右のあしを見せけりもくれんそんしやあ
19 ウ 9 しのうらを見給へは大せうみやうにとかき
19 ウ 10 つけ有いよくもくれんそんしやかなしみ給ふ
19 ウ 11 事限なしわかちからはすくいあたきとや

- 20オ1 おほしめししやうとに帰りしやか如来
20オ2 にかくとのたまへはしやか如来一さい三世仏
20オ3 をひきつれたまひ色々の物をひとつに
20オ4 かきませてそなへみそはきの花にて水を
20オ5 たむけ給へは常にはかきのめには水は火
20オ6 と見へうくる事ならざるかたむけによ
20オ7 りて水と見へてもくれんそんしやの母を
20オ8 はしめとしていつれのかきもたむけをう
20オ9 け物みなそのちこくしやうふつをうる
20オ10 其数以上八万四千人何れも極楽にすくいとりけ
20オ11 りそのしよに云もくれんひもをたすけてき
- 20ウ1 也こししよのくをすくうと是あり此月日
20ウ2 七月一日よりたつねめぐりたまひ十六日にてす
20ウ3 くいとりたまふゆへにすへの世までもかやうに
20ウ4 とむらい侍りその色々のそなへもの水をた
20ウ5 むけ給ふときの御きやうせかきなれはいま

翻刻「としなかこう」(入口)

- 20ウ6 にほんにはせかきをよめり是よりみそは
20ウ7 きをはしよくこんさうともいへり又水に四けん
20ウ8 有とは天人は水を見てまりとなすうをは
20ウ9 くう天となす人は水と見るかきは火とみ
20ウ10 る此四つなり然はけんとななる人はしゝて
20ウ11 はかきと成水を火と見侍ればけんとな
21オ1 の心をすて、しひの心さきとしこしやう
21オ2 をねかひ給ふへしゆへに弘法大師たゝ
21オ3 みによせて
21オ4 しひをもてしやうしきへりにちへのいと
21オ5 たうの中こみわかのうらこも
21オ6 とよみ侍り翁云ありかたくのりのをしへ
21オ7 を聞なくくさりなからいまはみたしやくわん
21オ8 おんもめに見へたまはすたうしさかんなるし
21オ9 うほしいつれをたのみほたいをもとむへきやそ
21オ10 れかしいわくさるにおみてはたうしさかんなる
21オ11 しょうくのたてはをあら方とくへしいつれの

- 21ウ1 しうにも入給へまつ天台真言はけんみつの
 21ウ2 しやありといへ共いつれもくちにしんこんをと
 21ウ3 なへてにいんけいをむすひちゆう夜にほけきやう
 21ウ4 をよみたまへりこまけきやういろくのはう
 21ウ5 あり此宗にいらはげんぜあんおんにして後生前
 21ウ6 生にしやうする也と弘法大師の歌に
 21ウ7 あかつきはまたはるかなりたつの山
 21ウ8 なをかきたてよのりのともしひ
 21ウ9 又さいかたうかは両はといへとしんの一ほうをかん用
 21ウ10 とせり一千七百そくのかうあん有きようけへつてん
 21ウ11 ふりうもんしにしてをしゑの間にあらはす
- 22オ1 外とさとりをひらくほんきうたうのしう也
 22オ2 有歌の二つを立てて一のさとりにてきわめ侍
 22オ3 り但大しようのはうなり古歌に
 22オ4 いへことのかきねにおゆるからすうり
 22オ5 うむとはいとくう人もなし

翻刻『としなかく』(入口)

- 22オ6 又しやうと宗はひとへにまつせのどんこんむ
 22オ7 ちをたすけんため也殊しやうほん大わうりん
 22オ8 しうの時もしやかねん仏をすゝめてわうしやう
 22オ9 ましませりくくわんの一しうはまんきやうの
 22オ10 そうちとしてあみたの三しはしよとくのこん
 22オ11 けん也八まんしよしやうきやうかくせあみた
 22ウ1 仏にきせりゆへに古歌にも
 22ウ2 又もまたあらはや人におしへへし
 22ウ3 なむあみたふの六つのほかには
 22ウ4 又日れん中は四十より年のせつはうは
 22ウ5 しんしつにあらはすとて妙の字一字をかんもん
 22ウ6 とせり中にも女人成仏はりう女八さいのとき
 22ウ7 大はほんにて成仏するゆへに女人は此しうに
 22ウ8 いらすは成仏なりかたきとすゝむる宗也か
 22ウ9 の龍女の一ねふりをかにかふるに人間の式十年
 22ウ10 にあたれり一日一夜は四百年にあたれり一
 22ウ11 年は二千九百式十年にあたれりしかれば

- 23 才 1 八歳のうちのとし数は人間の九十七万三千五
 23 才 2 百年にあたり人間の夢の世の間にさへつ
 23 才 3 もるこつしやうはしゆみにたとへるいわんや八
 23 才 4 歳のうちのこつしやうたとへかたきなり大
 23 才 5 はほんのくりきにて龍女成仏みやうてんのくり
 23 才 6 きありかたく侍り日蓮は初は天台にてやう
 23 才 7 しやろくしやにのりたまへるかこしのくるま
 23 才 8 にひきちかへたまひ日れん宗と立給ふ初の
 23 才 9 歌に
 23 才 10 やくそくもたかへて物のうれしきは
 23 才 11 のりちかへたるくるまなりけり
 23 ウ 1 をよそたうしはやる宗是也此よのりつ
 23 ウ 2 しうくしやしうしりほつさう三そんいまの世に
 23 ウ 3 おとろへたり翁曰御もんとはいかやうなるたては
 23 ウ 4 に候やそれかしこたへていわくさいけ一たうと
 23 ウ 5 いひて宗師にはあらずそくにも出家にも侍

翻刻『としなかく』(入口)

- 23ウ6 る間かうむりになつてへんふくの宗とは
23ウ7 いふ也此ともからはあんしんけつしやうをた
23ウ8 たしくして御たすけ一ちやうと一心一かう
23ウ9 にそんして朝夕ねんぶつは御たすけかたしけ
23ウ10 なしとの御礼なりといへり翁からくと打わ
23ウ11 らいいまは何をかつ、むへきわれはせきの
24オ1 ひんかしにとしを経たるかうかく聖人と
24オ2 いへる物なり其方のちへのほどを心見ぬかために
24オ3 来るなりされは三五のとしより仏法に入七十
24オ4 のかくをつみ内てん外てんにくからすされはか
24オ5 くなつてこきやうにかへりたるはにしきを
24オ6 着て夜行かことくといへり本国越中森山の
24オ7 生まれなるによつて此二月のなかはにきさら
24オ8 きやも、の月にそつきにけりしやかの御弟子と
24オ9 なりてはふものうちはいらされ共とても事
24オ10 になるへしわかち、はわたぬきの源太と申て
24オ11 われら三歳のとしの五月廿日森山に而

- 24ウ1 むなしくなりぬるを今高岡ほとりにてはう
24ウ2 むる也いつくほとにてやといま来りたつねか
24ウ3 なしむなみたは五月雨の一日二日をつるまにとし
24ウ4 なかきやう御遠行一しのけふりとならせ給
24ウ5 ふをおかみ申さんとこれにあるに色々の物かた
24ウ6 りはくかけんをひけはしきる心にあるに同じ
24ウ7 きといひをわつてたいさんするかとおもへは夢覚に
24ウ8 けりかうかく聖人となのりたるは高岡のしやう
24ウ9 人といへるもしなれはた、ならんれいむとおもい
24ウ10 侍る是につゐてあらたにしろをとりたつるに
24ウ11 は四つの大事を覽たて侍り一には神地二には仏地
25オ1 三には入所四にはこつほうの地也高岡の御しろこつ
25オ2 はうの地とうけたまへはさやうのれい人かと
25オ3 おもひ侍り何事もみなゆめのうき世きんき
25オ4 よをおむ物になしまんちうしよしのたつ
25オ5 とき御くらしもしやうろうしのくるしみのか

翻刻『としなかこう』（入口）

- 25才6 　　る、ためしなし老少不定の世なれば
- 25才7 　　わかきもたのみあらず老たるとではや
- 25才8 　　く死スヘキニモアラスよしそれとてもいと
- 25才9 　　ふへき事なしすきんくわの一日とせうし
- 25才10 　　よの千とせも一栄一楽なりはうその八百歳
- 25才11 　　もなんのゑきやあるあひへつりくはよのな
- 25ウ1 　　らひいまさらをとろくへきにまします
- 25ウ2 　　た、御ほたいのためには朝夕の御たむけにし
- 25ウ3 　　くはなしと古よりも申伝へ侍り
- 25ウ4 　　奉悼瑞龍院殿従三位前黄門聖山
- 25ウ5 　　英涓大居士 道空居士九拜
- 25ウ6 　　五十余霜一夢中 人間万事本来空截断
ヨさういちむのうち
- 25ウ7 　　春秋冬夏唯如是 当头颯々風
しゆんじとうかたかくのごとく なたうさつくな
- 25ウ8 　　ゑいけんさま御歳五十余に侍れば五十よそ
- 26才1 　　とをくなり一夢の事とは古歌に
- 26才2 　　よしあしのそのなはかりは津の国の

- 26才3 なにわの事も夢の世の中
 26才4 けふもまたはやあすちかくなりにけり
 26才5 みな一ときのゆめのたわふれ
 26才6 人間万事ほんらいくうとは古歌
 26才7 くうよりも生れ来にける人の身は
 26才8 し、てもおなしくうにこそいれ
 26才9 世の中のたかきひき、もふるさとは
 26才10 をなしすみかのみなのみはくう
 26才11 春秋冬夏た、かくのことは古歌に
 26ウ1 春は花夏は青柳秋もみち
 26ウ2 冬はくち木となれる世の中
 26ウ3 世の中はさきみたれたる花なれや
 26ウ4 ちりのこるへき一朶もなし
 26ウ5 せつたんのたうくさつくたる風とは
 26ウ6 古歌に
 26ウ7 生れけるそのあかつきにしにぬれは
 26ウ8 けふの夕部も松風ぞ吹

翻刻『としなかこう』（入口）

- 26ウ9 松風のこゑのうちなるかくれかは
26ウ10 むかしもいまもすみよかりけり
26ウ11 同ゑいけんさま御なのりによせたてまつりてそれ
- 27オ1 かしーしゆ
27オ2 なにしおふすへとしなかとおもひしに
27オ3 いそちの夢のまくらなりけり
27オ4 英涓様五十よさうの御さかへろせいくわ
27オ5 しゃうのかんたんの夢かとおもひ侍り
27オ6 何事もふちたんさいをはゝかるまてに
27オ7 侍り
- 27ウ1 元和第七
27ウ2 弥生二念四日